

農山間地域の高齢者が「できる限り在宅生活を継続する」ために必要な要件
—民生委員の活動を通し高齢者の生活の実情と課題を探る—

Requirements for elderly adults in rural communities to be able to
continue living at home as long as possible

—Understanding the lives of elderly adults and challenges they face through public
and child welfare committee activities—

石橋 文枝

ISHIBASHI Fumie

キーワード：農山間地域 高齢者支援 在宅生活 民生・児童委員

key words: rural communities, elder support, living at home, public and child welfare committees

要旨

本研究は、高齢者ができる限り在宅生活を継続するための要件を明らかにすることを目的とした。島根県の東部に位置する雲南市の農山間地域の2つの町村に焦点を当て、雲南市社会福祉協議会の協力を得て、2つ町村の民生委員に「高齢者の生活の実情と課題」についてインタビューガイドに基づき、フォーカス・グループインタビューを実施した。分析は質的帰納法を用いて分析を行った。結果、農山間地域でも2つの町村の地域差に伴う住民の生活意識の違いや民生・児童委員の介入の程度の違いが高齢者の安心・安全な生活に影響を与えること、また、高齢者の支援を阻害する要因等が明らかになった。以上のことから、支援者側のノウハウだけではなく、高齢者と地域のつながりの仕組みや高齢者自身の生き方・考え方・家族とのつながりの強化が求められた。

1. はじめに

平成24年度の高齢社会白書では、人生の最期について6割弱が「自宅」を希望しており、介護を受けたい場所については、福祉施設より「自宅で過ごしたい」が4割弱、「医療機関」が2割と約6割は在宅に近い環境を望んでいる。高齢者が不安の少ない生活を維持していくためには「健康の保持」があげられるが、加齢とともに心身機能の低下は避けられない。加齢による心身機能の低下は、日常生活の自立困難を引き起こし誰かの援助を受けながらの生活を余儀なくされる。

我が国は、少子高齢化、老人診療にかかる医療

費の増大、家族形態の変化、特に家族介護については、既に家族力は脆弱化しており家族に介護を期待することは難しい。それらを背景に、2000年に介護保険制度が導入され、既に14年が経過する。

介護保険制度における介護給付サービスの地域差において、都市部に比べると、地方に施設サービスの需要の高いことが報告されている。介護給付サービスの地域差について厚生労働省は、地域ニーズに反映して起こるものは本来のあるべき地域差としている。しかし、長倉は、少子高齢化、人口減少という構造的な変化に伴う市町村の財政力の差や福祉行政の基本的なノウハウ不足という市町村自身に問題があることを指摘して

いる。

これらのことをふまえ、本研究では、農山間地域の高齢者の暮らしに焦点を当て、高齢者の身近で支援活動を行っている民生・児童委員（以下、民生委員）を被調査者に選択した。民生委員の高齢者支援活動を介して見える高齢者の生活の実情や地域の課題から農山間地域で暮らす高齢者ができる限り住み慣れた地域で生活できるための要件を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

調査期間は、2013年2月から2013年7月。

1. 調査対象地

調査地は、我が国の高齢化率第2位(2009)の島根県にある雲南市を選択した。雲南市は平成16年に6つの町村合併からなる高齢化率33%の地域である。本研究の調査対象地を選定するにあたり、島根県雲南市木次町にある地域包括支援センターと雲南市役所の保健師に、調査目的を説明し雲南市6町村の高齢者支援の実態についてヒアリング調査を行った。

雲南市6町村のうち4町村は、比較的、商街地や平地で高齢化率も32%前後と共通しているが、その中でも木次町は、雲南市の中心市街地であるが商店街の空洞化や低迷が顕著であり、1人暮らしの高齢者が多い特徴がある。

6町村のうちの残りの2町村は農山村僻地で人口減少、高齢化率が際立って高い。2つの町村のうち、一地域の「吉田町」は、要支援・要介護高齢者以外に健康高齢者の交流の場としても広域的に機能する高齢者支援の施設を有していて雲南市でも活動性の高い地域であることが分かった。

そこで雲南市の中でも、比較的平野部で生活の利便性のよい木次町で暮らす高齢者と山間僻地の高齢化率の高い環境で暮らす吉田町の高齢者

の生活の共通性、相違性を通し農山間地域で暮らす高齢者ができる限り住み慣れた地域で生活できるための要件をより明確にするために、木次町と吉田町の2地域を調査対象地に選択した。

1) 吉田町の地域概要

人口総数2,039人、世帯数683世帯、高齢化率39.6%と2.5人に1人が65歳以上の高齢者が住む農山村地域である。年少者人口も減少傾向である。地域の産業をコーリン・グラント・クラーク(Colin Grant Clark)の産業分類で見ると、第一次産業の農林業が他の町に比べると高い。しかし、少子高齢化の進んだこの地域では後継者不足から農林業は廃れてきている現状がある。高齢者の多い世帯集落では、安全に生活ができるように住民間でお互いに安否確認する生活、冬場の厳しい自然環境にある地域のお年寄り世帯では、近隣市に住む子供のところに一時避難するなど様々な生活様式がみられる。また、吉田町内の1地区には、よしだデイサービスセンターがあり、健康予防教育から介護保険施設として広域事業展開の場になっている。吉田町周辺地域の高齢者支援やこの地区の高齢者の交流の場としての機能を果たしている。また、施設に隣接する多機能型施設も有し農山間地域の高齢者支援の拠点になっている。

2) 木次町の地域概要

木次町は、吉田町と比較すると雲南市でも中心部に位置し、平野部、山間地もある12の地域からなるが、6地域は、山間地域にある。

人口は9,239人、世帯数3,122世帯、雲南市では人口規模の高い地域で高齢化率は31.9%である。65歳以上の1人暮らし世帯は1割だが3割弱が緊急通報設置台が設けられている地域である。ここ数年、人口と世帯数は増加傾向の見ら

れる町でもある。この増加は、町内の僻地の世帯が生活の利便性から町内への移入によるもので、外部からの転入は少ない。調査の木次町の中心部は、単独世帯の高齢者が多く、安否に不安をもつ高齢者が生活をしている地区で、高齢者支援における困難な事例が多い。昔から商街地として賑わい、町内だけではなく隣接町の人々の生活用品を扱ってきた地域であったが、同町内や隣町に衣食料品を扱う大型店舗の参入や町の高齢化が進むと同時に、従来の個人店舗の利用も減り、空き家や商売をする店舗も減少し廃れてきた町になり地域力は低下している地域である。

高齢者支援については、交通の利便性の良さや隣近所が隣接している地域性、雲南市の高齢者介護の大半のサービスの事業所や施設は木次町の中心部に集中している。

2. 吉田町・木次町の民生児童委員への調査依頼手続き

吉田町・木次町を統括する本庁の雲南市社会福祉協議会の担当者に本研究の目的、方法と調査内容について、文書と口頭で説明後、2町村の民生委員への調査協力を依頼し承認していただいた。その後、本庁の担当者から吉田町・木次町の各支所の担当者に調査協力の依頼をしていただき吉田町の7地区うち2地区を担当する民生委員2名（男性2名；1名退職後に委員を担当、1名は、退職後も嘱託で働きながら兼務）の承諾を得ることができた。木次町も同様に支所の担当者を通し10地区10名の民生委員（男性3名、女性7名）の承諾を得ることができた。

3. データ収集方法

1) フォーカス・グループインタビュー法

Beck, TrombettaとShareは、フォーカス・グル

ープインタビューについて、具体的な状況に即したある特定のトピックについて選ばれた複数の個人（6人から10人の比較的同質のメンバー）によって行われる形式ばらない議論である。

Kruegerによるとフォーカス・グループインタビューの目標は、ある特定の話題に対して、率直で日常的な会話を作り出すことにあるとしている。フォーカス・グループインタビューは、リラックスした雰囲気の中で非常に幅広い、より包括的な参考となるデータが得られる手法である報告から面接方法はフォーカス・グループインタビュー法を用いた。

2) 面接環境

(1) 吉田町の面接環境

社会福祉協議会吉田支所の担当者の厚意により調査時間の調整、吉田町交流センターの和室の確保をしていただいた。2月の寒い時期であり炬燵に入りゆっくりと話を聞ける環境を提供していただいた。

参加者は、2名であり活発なディスカッションは困難と考え、進行は、研究者が担当し参加者が自由に発言できるように配慮した。インタビュー内容は、研究者が作成したインタビューガイドの6項目{①高齢者の生活・相談内容について②高齢者の交流の状況③民生委員と他機関との連携④家族の介護について⑤高齢者支援を通して、在宅生活と施設入所に対する私見⑥農山村の高齢者の望ましい老後の生活、期待すること}について討議した。地域の具体的な課題等に対しては、社会福祉協議会吉田支所の担当者にも自由に意見を述べていただいた。

(2) 木次町の面接環境

吉田町と同様に、社会福祉協議会木次支所の担当者の厚意により調査時間の調整、木次町の

コミュニケーションセンターの会議室を提供していただいた。会議室の机のセッティングについては、木次町の民生委員が通常委員会を開くスタイルの設営で、緊張を与えない環境設定をしていただいた。参加者は、雲南市社会福祉協議会本所の担当者、支所の担当者の参加を含め、民生委員10名で、お茶を飲みながらリラックスした環境で実施した。司会は、研究者が担当し討議の過程で、各項目に関連して参加者の意見や情報を引き出せる形で介入・進行を行った。

参加者は、10名と数の確保ができたので、フォーカス・グループインタビューの手法に基づき、吉田町同様にインタビューガイドの6項目を厳守しつつ、日頃の高齢者支援を通して感じていることなどを自由に発言する形から開始した。

2 地域のインタビュー内容の記録は、研究者の筆記と参加者には事前に承諾を得てボイスレコーダーを使用させていただいた。インタビュー時間は、120分程度を要した。

4. 分析方法

質的帰納的方法を用いて分析した。民生委員から得られた録音内容を逐語録に起こしデータとした。データを複数回読み返し、全体像の把握に努めた。担当地域の高齢者の生活・相談内容や地域の高齢者の交流、民生委員と他機関との連携、家族介護や施設入所に関する考え方、農山間部の高齢者の望ましい老後の生活、期待することなどについて語られている部分の文脈を一文または段落ごとに切片化した。文脈が損なわれない表現に留意しながらコード化し類似グループに分け、特徴を表すタイトルを命名しサブカテゴリー、カテゴリー化を行った。

5. 倫理的配慮

参加者には、研究者から研究の趣旨、匿名性

の確保、プライバシー保護、研究への自由な参加と途中辞退について説明し了承を得た。また、事前に社会福祉協議会の担当者にも口頭と文書で説明し了承を得て実施した。なお本研究は研究者の所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

III. 結果

1. 吉田町の高齢者の暮らしと支援の現状

インタビューデータの分析結果、4つのカテゴリー、11のサブカテゴリー、73のコードが抽出された(表1)。

本文の内容には、カテゴリーは【 】, サブカテゴリー《 》、「 」はサブカテゴリーのコード内容を集約して示した。

1) 【巡回から見える高齢者の生活】

《高齢者の生活の把握状況》、《巡回を通してみえる住民・高齢者の気持ち》の2つのサブカテゴリーに整理された。

《高齢者の生活の把握状況》は、「民生委員には直接的な相談事は少なく民生委員が定期的に高齢者の所に出かけて生活状況を把握している。訪問する回数は、月1回程度で、気になる高齢者でも見守りに慣れているかどうかや一人暮らしの高齢者であっても達者で農作業をしている人もあり声を掛けるのは、かえって気の毒な感じがする」。高齢者の安否確認を含め巡回する回数は少ないために高齢者の生活状況の把握については不十分であることが述べられた。

《巡回からみえる住民・高齢者の気持ち》は、「高齢者の生活は、子供等が独立し実家を離れ別居している世帯が多い。子供が親(家族)のことを先々どのように考えているのか分からない。民生委員の印象では、顔をあわせてもあまり世間の世話になりたくないという気持ちが汲が取られている。また、この地域は、季節的に冬場に

なると自分では雪かきできない問題や冬場の不安、1人暮らしの生活の寂しさなどから精神的に落ち込みの誘引になっている。生活については、訪問すれば家の事情がだいたいわかり介護の問題より経済的な問題が多いと思われ、生活苦の問題が結構ある。高齢者の暮らしの心配はあっても若い人は、生活のために仕事をしないとけない。稼ぎに出ないとけない環境があるから年寄りも残される。」

この地域は、冬場になると雪かきの問題や外にでる機会も少なく人との交流も少なくなる環境で民生委員も冬場は一人暮らしの高齢者の生活環境は厳しく心配な状況であると述べている。また、高齢者が周りに迷惑をかけないように気を張って生活をされている様子が述べられた。

2) 【地域連携と支援の壁】

《民生委員と対象家族との関係性》、《民生委員と他職種との関係》、《民生委員の活動の壁》の3つのサブカテゴリーに整理された。

《民生委員と対象家族との関係性》は、「民生委員として関わった高齢者自身からは、感謝の気持ちを受けるが、家族からは感謝をされることは少ない。」常に顔をあわせる高齢者との関係はできているが、家族との関係性には距離感がうかがえた。

《民生委員と他職種との関係》は、「高齢者について相談する機関の一つである地域包括支援センターとは、信頼関係があるから割といろいろ相談がしやすい。いい世話をしてもらえる。何かあると包括に相談する。介護が必要な高齢者になると、介護事業者が世話をすることになり、ケアマネージャーとは、接触することはなく任せることになる。民生委員自身も嘱託で仕事を持っているためなかなか会議の時間の調整もつかない。会議があっても出席する時間が取れな

いのが実情。」

民生委員と地域包括支援センターとの協働場面は多く民生委員が活動する上で重要なサポート役割を果たしている。一方、要支援・要介護絡みの高齢者になると介護業者に任すかたちになり、サービス担当者会議などへの参加も時間的な問題で参加できない等により協働・連携の困難な状況が述べられた。

《民生委員の活動の壁》は、「対象の高齢者のことについて業者の人に聞くのは個人情報に触れるので聞きづらい。聞かれてもサービス業者も個人情報は壁になるから話してはもらえない。地域住民の近所づき合いでも、出かけるときに近所に声をかけて出られるわけでもない。近隣者が入院されていても「入院されたげな」程度の情報しか近所の人も持たない。」

民生委員が高齢者支援活動を継続するために必要とする個人情報も「個人情報保護法」にもとづき提供してもらえない現実がある。また、地域住民も近隣者の異変や変化についても必要以上に詮索しない近隣の関係性が支援活動の壁になっていることが述べられた。

3) 【在宅生活の限界】

《在宅生活の困難な環境》、《地域の援助関係》の2つのサブカテゴリーに整理された。

《在宅生活の困難な状態》は、「近所の付き合いはあっても、お互いになかなか頼めないこともある。体の具合が悪い時など、同居家族がいないと避難場所がないのが現実。「大体、誰でも死ぬまで地域にいたい」と思っているが、身体がいけんよう(生活ができない状況)になると入院か施設になる。対象者の中には、施設を当てにしないとけないというニュアンスのことを言われる。看護がいるような病気の方は、ほとんどが入院か施設入所をする。同居する家族は、その方が

楽になる。別居している家族は安心できる。また、ここの地域は、60歳過ぎの子供が80なんぼの親を見ている世帯も多い。」

地域住民間の日常的なつながりはあっても家の中で起きる問題は、個人的な問題、家の問題であり地域で共有する環境は低い。1人暮らしの高齢者を含め高齢者の生活意識は、健康な時は家で生活を、身体機能が低下したら家族を含め人に迷惑をかけない選択という意識がある。家族構成から見ても家族資源の低い状況が述べられている。

《地域の援助関係》は、「冬場の生活では、雪かきをすることは大変になる。隣近所で雪かきを手伝って上げるのもいいが、中途半端な距離に家族（子供）がいると雪かきぐらい戻ってしてあげればいいと近所の人と思われると思う。本当にえらかったら（大変だったら）近所を頼られたらいいとも思う。逆に、頼まれないのに隣の雪かきをすればお節介になることもある。助けたい思っても助けて欲しいという発信がないとね。助け合いになるには、そういう環境が必要になる。先々、困る人がいっぱいになる。10年先のことはわからない。」

農山間地域の暮らしのなかで高齢者が自力でできる生活能力には限界がある。別世帯で暮らす家族とのつながり、地域住民との関係性の問題、高齢世帯が増えていくなかで地域住民間の助け合い活動に対する自助・互助関係は、高齢者の意識も含め未成熟な環境が述べられていた。

4) 【地域生活・環境の変化】

《地域交流の媒体力の低下》、《高齢者間交流》、《集落の寄り合い場の環境》《地域の将来》4つのサブカテゴリーに整理された。

《地域交流の媒体の消滅》は、「昔のここら辺は、どこにも子供がおって、子供が媒体で近所の家の様子がよくわかった。農作業も手代わり農業だっ

たのでお互いのことがよく見えた。今は、手代わり農業から機械化に移行し交流の機会がなくなり地域に子供の数も少ない。昔は、意識していなくても若い世代のつながりがあった。年寄りのこともよくわかった反面、昔のことを思ったら「今は、地域で支え合わないといけないという空気は非常に強くなっている（吉田支所の担当者）。」

地域の特徴として、絶対的な子供の減少と高齢化による農業の廃業等で地域の交流の機会の減少や地域の活性化が低下している。吉田支所の担当者は、地域のなかでは「支え合いの必要性のニーズの高まり」が述べられている。地域で支え合えるコミュニティ作りの必要性が述べられていた。

《高齢者間交流》は、「高齢者同士の付き合いでは、高齢者の憩いの場「サロン」を街では（木次町を指している）声をかけ「和作り」ができるが、この地域は、老人クラブに参加している人がサロンに参加し、老人クラブに入っていない人はその「和」には入りにくい環境がある。若い世代は仕事で外に出ておられ、なかなか地域全体で支え合うのは難しい。」地域には、それぞれの交流の方法があり、この地域は、健康な若い時から仲間づくりや集いの場に参加しているとその後の高齢者のふれあい活動にも躊躇しないで参加できることが述べられている。反面、普段から近隣との関係を持たない環境があると高齢になってからの集いの場を得る難しい地域環境が伺えた。

《集落の寄り合い場の変化》は、「若い人も集落の常会には出られるけどもそれ以外の付き合いはなくつながりができにくい。親と別居していて地域の集まりの時に出席する若い人は、常会の場に居づらいこともある。また、60歳位の人が高齢の親と同居しているケースも多いところなので、自分の家のことだけを言える環境にもない。家の高齢者の問題について、誰かが口火をきり呼びか

けることはない。一般に身内の問題になる。認知症の高齢者に対して、地域の助けが必要になるが自治会がはそういう場所にはならない。」

地域の自治会は、次世代で形成され高齢者は身を引く。この地域の自治会は農事についての集まりが中心で地域で起きている高齢者の問題や認知症の高齢者のことについて意見交換する場にはならない。また、寄り合いの場の関係性も希薄

な環境になっていることが述べられた。

《地域の将来》

「今後の暮らしは見えない。今後は、共同住宅を作ってそこで暮らすような集団生活しかないかな。この辺は、限界集落というより消滅していく地域になる。」 民生委員として地元民として、この地域の活性化に必要な環境要素が低いことから将来に対する悲壮感が述べられた。

表-1) 吉田町；民生委員への聞き取り調査結果

	サブカテゴリー	コード (内容)
巡回から見える高齢者の生活	高齢者の生活の把握状況	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日、四六時中見廻りに出るわけにも行かんですし、1人(独居)の人には月に1,2回の訪問をする。今は、独居とか老老生活の所へ行く。 ・本当にいけなくなったら(困った時)相談があるけどわりと本人から相談はない。 ・生活に何か変わったことがないか、相談があるかないかというぐらいで、がい(大きく)に状況が変わってないかを知るぐらいで、毎日、四六時中というわけにはいかない。 ・ちょっと元気な人(高齢者)に月1回でも見に行くのが気の毒になることもある。畑なんかでも85,86歳でもびんびんしておられて、どげなかね(どうですか)と聞くのも邪魔に行くような感じで...大抵、見守りです。 ・気になって電話してもした時には出られん。すると気になる。 ・訪問したら家の事情は分かる。金があるかなどは、厚生年金じゃないから。
	巡回を通して見える住民・高齢者の気持ち	<ul style="list-style-type: none"> ・しんしんと雪が積もると昔(若い時)は、雪かきができたけど1人だと気になるけども自分ではできない。そういった不安がある。 ・冬場は精神的に落ち込むことが多い。顔を合わせてどちらかという地域の人に世話になりたくない気持ち強い。 ・1人で寂しい思いをする。 ・子供が遠くに出ていると(離れて暮らしている)、本気で家族のことを考えていない状況に見える。 ・案外、同居している息子の生活や経済状況から悩みを持つことが多い。 ・1人暮らしで冬場の生活のことで、高齢者住宅などに「行かんかね」と言っても「元気だからいいわ」といわれる。 ・100歳でベッド上の生活で全然耳が聞こえない人でも、ヘルパーさんが1日2回位きて、一人で暮らしておられる人もいる。 ・サービスを利用するのでも自分が金額負担をする。要するに子供に負担をかけたくないという思いがあって、何回でも来てもらうといいかもしれないけどもそうするとお金がかかる。 ・「金がなくていけん」と直接は言われない。でも言ってみれば大体わかる。まだちょっとそういう年代が多い。 ・子供と同居していなくても金のある人はきちんとしておられる。子供が他所に出ておられ本人がいらんと言ってもきちんとされているところもある。 ・大体、自分でちょっと庭に出て草取りのできるような人は1人でも生活ができる。 ・大変なのは経済的なこと。経済的なことが多い。 ・介護というより生活苦が多い。 ・年配(高齢者)の方をどうのこうのといっても、生活をしないといけないから若い人は稼ぎに出る
地域連携と活動の壁	民生委員と対象家族との関係性	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者の年寄りさんは「なんと、来てもらってよかった」と感謝される。家族からは感謝の気持ちでも、言葉でもほとんどない。 ・私は8年間やっても1回もない。 ・電話1つでもあった時、世話になっているという言葉があっても不思議じゃない。 ・まあ人によって違う。「ありがとね」という人はそう思っている。
	民生委員と他職種との関係性	<ul style="list-style-type: none"> ・地域包括がいい世話をしてくれる。 ・介護とかそういう仕事は地域包括に相談する。 ・地域包括からも相談がある。 ・高齢者は、地域包括がどこにあるかわかる人はおるだろうか? ・介護がいるようになると業者になるでしょ。業者さんが入ると関わりはなくなる。 ・介護が必要になっておられる人についてケアマネジャとは、あんまり接触はせん(コンタクトとらない)。任せるかたち。 ・ケアマネジャとの協働は時間的なことがあって、会議に出席する時間がない。嘱託の仕事もあるその中でこの仕事(民生委員)をしている。その合間を縫ってのことだからなかなかねー。

	民生委員活動の壁	<ul style="list-style-type: none"> ・地域包括は、どうか昔からの信頼関係があるから割と話ができるけど業者には聞きにくい。 ・住民も人によるけども、個人の生活を隣近所に言っ出て出る人も中にはおられるけども、全部が全部じゃないからわからないことも多い。 ・住民のことで聞きたいことがあっても、結構、個人情報のことを業者は気にするだろうと思って聞きづらい。 ・業者も聞かれても、個人情報だから壁になる。 ・今は案外、隣の人のことも「入院されたげな」ぐらいのことで詳細はわからないことが多い。
在宅生活の限界	在宅生活の困難な環境	<ul style="list-style-type: none"> ・何か困っても知り合いに頼めんこともある。 ・体の具合が悪いと気持ち的には、家族がいればいけれどおられんと余計、避難場所がない。 ・この辺の高齢者は、地域で死ぬまで居たいと誰も思っている。大体、誰も思っておられると思う。 ・これからの生活がいけん時には（生活ができなくなる）、「施設を充てにしなくてはいいかな」というニュアンス的なことを聞く。 ・看護がいるような病気の人は入院とか施設入所です。ほとんどが。 ・施設を利用すると同居家族は楽になるし、別居している家族は安心できる。奥の方（更に山奥）に比べると、まだこの辺はいい、病院もある。 ・最近では男の人が60歳過ぎの人が80歳過ぎの親を見ておられるパターンが多い。
	地域の援助関係	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の家の雪かきなどは、してあげるのはいいいけども、本当は、その家族が戻ってやればいいと思う気持ちが地域の人にはある。 ・中途半端に家族が近くにおられると家族が戻ってすればいいことだと思う。雪かきにしても他人が要らんことはせんでもいいけど、本当にえらい時（しんどい時）は、人に頼られた方がいい。 ・隣の雪かきは相手型の発信があればだが...逆におせっかいになる。助け合いをするにはそういう環境にならないといけない。 ・してもらいたいと思う人、困っている人、悲惨な感じ、先々困る人がいっぱいになる。 ・10年先のことなど想像がつかん、わからん。
地域生活・環境の変化	地域交流の媒体力の低下	<ul style="list-style-type: none"> ・昔はそれぞれの家に子供がいて、遊びに行くだけであそこのおばばがどげだったとかの情報や農業を通して交流があった。 ・今は地域に子どもがいない。 ・地域の生活に共通するものがなくなった。 ・昔は農業を手代わりで田んぼの仕事をしたが、今はそういうことがない。同じ年頃の子供も近所にいない。 ・昔のことを思ったら今は、地域で支え合わなければいけんという話とかの空気は非常に強い。同じ町村でも地域差はある（社協の担当者）。 ・昔は意識しなくても若い世代のつながりから年寄りのこともわかった。 ・高齢者のことは、今は行かないとわからない。
	高齢者間交流	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分の所にも高齢者がいるので」と相互の助け合いも期待できない。 ・その時を元気に高齢者が住む。今の時を考えないと先のことはわからない。 ・街なんかはサロンをしますと声を掛けて、初めて皆んなが和を作る。ここの辺は老人クラブに出ている人がサロンに参加する。老人クラブに出ていない人は「和」に入れない。 ・老人クラブに入れん人をどう支援していくかが難しい。 ・出たくない人は出られん。そういう人はいるけん。 ・高齢者に対して老人クラブに入りやいいがなと側のものは思うけども。若い人（世代）は外に出て働いておられて（家には高齢者だけ）、地域全体で支えるのは難しい。
	集落の寄り合いの環境	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症の人が地域で生活すると地域の助けが必要になる。自治会はそういう場所にならない。 ・昔は常会などは、各家を順番に宿していたが、今は集落センターや集会所でやるからわざわざ家のことを聞くこともない。 ・常会とかは農業などでやらないといけんから集まるけど、昔みたいに飲み会などの交流する機会はなくなってきた。 ・常会に出る若い人も出ないといけんから出る。その後の交流の場には出られない。 ・そういう変化が起きているのは、若い人の性格です。まちがいない。 ・常会に実家を離れて、親と別居されている若い人も、常会の時は帰ってこられるけども多分、おりづらいということがあろうと思う。自分がない間は、家族が地域の人にお世話になっているという気持ちがあるからだと思う。 ・独身者が多く、60歳近い人が一緒にいるようなそういう所なんで、なかなか自分の家のことを相談を常会の場ではできない。 ・自治会のことも農協とか市とか言えばその時はするけども、「うちはこうですが、皆さんどうですかなどと呼びかけることはない。 ・一般に身内の問題だから身内で考える。
	地域の将来	<ul style="list-style-type: none"> ・共同生活の場を作ってそこで生活をするようなことにならないと生活ができなくなる。 ・この辺は限界集落というより消滅していく所です。 ・人材育成、有償ボランティアなどが必要になるが、同じ人が引き受けている状況で一人の人の負担が大きい。

2. 木次町の高齢者の暮らしと支援の現状

インタビューデータの分析結果、3つのカテゴリー、7つのサブカテゴリー、50のコード抽出された(表2)。

1)【地域連携と高齢者のサービス利用意識】は、《他職種との連携の実際》、《介護給付サービスに対する高齢者の意識》、の2つのサブカテゴリーに整理された。

《他職種との連携の実際》は、「訪問時に民生委員だけでは対処できない時は、地域包括支援センターや市役所、保健所や社会福祉事務所に連絡を取りスムーズにできる。地域には、災害支援の担当者がいて、同じ対象者を支援するが災害時だけの支援活動という考えなのか日常的な生活に対する役割が見えない。」

町内に市役所も総合センターも地域包括センターとの連携で、すぐに対処できる環境がある。高齢者支援者としての役割意識やモラルについて積極的な意見が述べられた。

《介護給付サービス利用に対する高齢者の意識》は、「高齢者の1人暮らし世帯や老々世帯にサービスの利用を勧めたり、介護給付サービス導入後の高齢者の反応は、「迷惑をかけたくない」「どのような人が来てくれるか」「金がかかる」「あれこれ金がある」などの否定的な言動がある。介護サービスを使うことを勧めても「頑張ります」「頑張ります」と言われると大変だと思ってもそれ以上の勧めることは民生委員としてはできない。高齢者は、具合の悪い時には、介護給付サービスの利用は「ありがたい」と言われているが、体調が少しでも良くなると自分で思うようにしたい気持ちがあってサービスを使うことが負担で断りたいと相談するケースもある。」

介護給付サービスを利用している高齢者は、他人の世話になることへの遠慮や経済的な問題

などから、高齢者が安全・安心して生活するサービスの利用に至っていないことが述べられた。

2)【民生委員の活動内容とジレンマ】は、《民生委員の直接介入》、《民生委員のジレンマ》の2つのサブカテゴリーに整理された。

《民生委員の直接介入》は、「気になる高齢者の家に通い配食弁当の回収時に食事をきちんと摂られているか確認することもある。入院を受け入れない1人暮らしの高齢者に対して半ば強制的に入院をしてもらう場合もある。高齢者夫婦の片方が入院した後、残された高齢者の生活に対して離れて暮らす子供と連絡を取り地域包括と連携して調整することなどもある。老老世帯で妻が認知症で何かあったらという感じの世帯で、住民からの相談など様々な相談がある。」

一人暮らしの高齢者の食事の心配や健康上の問題や生活上の問題で民生委員が直接介入することで安全が図られている状況が述べられた。

《民生委員のジレンマ》は、「高齢者の生活環境や周辺のことなどで心配で市役所に相談したら守秘義務守で情報を得られなかった。また一人暮らしの高齢者さんは、子供が近くに住んでいて電話番号もメモを書いてほしいとお願いしても個人情報があるからと書いてもらえないこともあった。住民から「隣近所からいじめられている」とか地域のことで自治会長から依頼されることもある。民生委員は地域のこともなんでもするように思われている場合もある。高齢者支援では、気になる世帯があつて、訪問しても鍵がかかっていて家に入れなかったことがあり、異常事態だと思っても勝手に上がるわけにもいかないのが警察に連絡をして窓を割って家に入ったようなこともある。家族で関係性が悪いと「面倒みてもらえない」「世話をしてもらえない」という状態もある。血縁の関係は、昔のような関係は無い。

高齢者のことで連絡をしても私のところは付き合いが無いと言われる場合もある。」

介護保険の給付サービス活用の理解の不足や民生委員が適切に支援をしたいと思っても個人情報保護法絡みで支援に必要な情報の入手が難しい環境がある。高齢者に対するインフォーマルなサービスの活用を必要としても「家族の関係性の希薄さ」が問題として述べられた。

3) 【高齢者支援と住民間交流】は、《地域の自治会と高齢者支援》、《高齢者の交流の場》、《今後の地域交流のかたち》の3つのさうカテゴリーに整理された。

《地域の自治会と高齢者支援》は、/地区には、常会があり常会でなんでも地域のことは伝達するが、高齢者の世帯では出ないところもある。年寄りの場合、集金常会にだけ出るようなところもあり、自治会長から情報をもらうだけで地域での交際は無い世帯もある。地区の自治会の会長個人の意識によって高齢者に対する支援は違ってくる。

自治会の助け合いで、隣近所声掛け合って買い物支援で一緒に買い物に行くようなところもある。最近では、自治会単位でやっていたことを連合自治会や自主組織でするようなところもある。なかには困っている人がいて自治会長から民生委員に相談があって生活支援のヘルパーを入れるなど連携することもある。自治会の活動は地区差があり、昔からずっと続いている自治会、この数十年でできた自治会とは意識が違う。自治会だけの力では、支援は浸透しない部分もある。地域の付き合いが希薄な状況でもある。」

自治会活動は町内でも地区差はあるが、木次町の自治会活動には高齢者支援について取り組む環境がある。自治会のテーマが地域住民の生活上の課題にも注視される点では、吉田町の自

治会の運営とは差が見られ商業地と農山村過疎地域の自治会運営の違いが見られた。

《高齢者の交流の場》は、地域には、生き生きサロンがあり一緒に何かすることでコミュニケーションなどがとれる良い場になっている。生き生きサロンに参加する人はいいけども、参加しないが出てもらえるようになると安心する。このサロンは、運営していくためのマンパワーが必要だが、50代、60代は勤めをしているなどで担い手がない。音頭取りには負担になっている。地区によっては、見守りがあっていつもお茶を飲んでおられるところもある。なかには、近所同士でサロンのことをやっておられお互いに声を掛け合って茶を飲むような場を作っている。」

地域のサロン活動は、高齢者の交流の場として満足度の高い交流の場になっているが、運営していくための人材不足がある。地区によってはサロンのことを自主的に開いたり、昔ながらの隣近所同士が少人数でお茶をにんだりされている。小規模でも交流の場が高齢者にはいい刺激になっていると述べられる。

《今後の地域交流のかたち》は、/隣近所に気兼ねなくいけるような地域になるといい。昔のように小さな単位で寄り合うようなことができれば高齢者も生きがいを感じられる。親戚付き合いや近所付き合いを元気な時から上手に付き合い合うことが必要だと感じる人が多い。

一人暮らしの人が近所の人に見守りされる良い地域になるといいと思う。」地域のつながりや親族縁者の良い関係は、地域の高齢化が進み単独世帯も増加するなかでは不可欠で、お互いに手助けが必要な時に大きな力になると、現状の地域力の低下、家族力の低下の改善策として述べられた。

表-2) 木次町；民生委員への聞き取り調査結果

	サブカテゴリー	コード (内容)
地域連携と高齢者のサービスの意識	他職種との連携の実際	<ul style="list-style-type: none"> ・担当に災害支援時の要援護者で要支援者がいる。災害時ばかりでなく常々、訪問してくださいということが伝わっているのかいないのか。民生委員が指導していいのかどうかと思う。 ・地域包括さん、総合センターの保健師さん、行政の本庁の保健福祉課の生活保護の担当者、社協さんなどの連絡を取る。 ・医師との連携もある。 ・要請すると市役所や総合センターの人が来てくれる。 ・部屋に入って声かけをしても応答がないということでこれはやばいということですのですぐに地域包括に連絡をする。 ・娘さんが認知症になった時の対処で、地域包括に行き直ぐに保健師さんがこの家の収入では生活できないと生活保護を申請しましょうと対処がスムーズにできる。
	介護給付サービスに対する高齢者の意識	<ul style="list-style-type: none"> ・治療を終えて退院されたがヘルパー（1時間のサービス）を使っていたが元気になったから断りたい。具合が悪い時は、それでもありがたい。体調が良くなると自分で思うようにしたい気持ちがある。 ・ヘルパーにしてほしいことを言にくい気持ちがある。 ・ヘルパーがこらい（来られる）ことに対してどんな人が来られるか心配される。 ・奥さんが病弱で高齢の夫が介護されているところでは、台所のことをヘルパーにしてもらってよかったというところもある。夫が病気になるらどうするのかという話になった時「その時は入院するだわー」というと奥さんは「家がいい。ここがいい」「おじいさんに好きなことを言えると言われていた。先のことも考えておられる。 ・サービスを使うのに、人に迷惑をかけていることを気にされている。 ・サービスを使うとあれこれあれこれ金があると話される。通帳が空っぽになるとといけんといって年金生活なのでと。
民生委員の活動内容とジレンマ	民生委員の直接介入	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者が心配だったもんで行ったり来たりして、弁当の配達、その配達される方にも弁当を食べられているか回収時に聞いてある意味安心した。 ・なかなか入院を決めかねている人に「病院に入って体をちゃんとしてから家に帰ろう」という言葉を使ってなんとか強引に了解を取って病院に入院してもらったこともある。 ・急な入院で残されたおじいさんの食事の心配などがあり、遠くから帰ってきた息子さんを地域包括へ連れて行き、運良くその日の夕方から配食サービスを受けるようなこともありました。 ・老老という感じで奥さんが認知症で、訪問しながら何かあったらという感じで生活設計ができない。食品や日用品を付けにして歩いて溜まってしまって近隣から相談があったりする。 ・「このまま家で生活してもダメだけん」と本人が入院したくないというのを病院に入院するように説得をしたり、あるいは「入院しましょう」と促したらスムーズになづかれ入院できたりもする。 ・家ででの生活が難しいから生活保護の申請を勧めても「頑張ります」と何回もいわれると大変だと思うけどそれ以上何もできない。 ・年金の少ないところ多いところそれぞれ。介護度が高いからといって1割負担と言っても家計のことを考えたら難しい。
	民生委員のジレンマ	<ul style="list-style-type: none"> ・生活保護や周りのことで心配で市役所の相談したら守秘義務で情報を得られなかった。 ・隣近所からいじめられているという相談が来たりする。 ・地域で起きている問題について何でも民生委員にも顔を出してくださいという要望がある。1人暮らしの高齢者に近くに住んでおられ息子さんに連絡を取りたかったので電話番号を記録して欲しいと言っても個人情報があるからと書いてもらえないことがあった。 ・家族に相談しますと言って1ヶ月経っても返事がない。 ・自治会長もなんでも民生委員に頼まれる。民生員だから頼むということがある。 ・プライバシーや個人情報に邪魔になることがある。 ・緊急の場合でも黙って入ると不法侵入になる警察に連絡して窓を割って入ったこともある。 ・血縁の関係でも昔のような関係はない。 ・親子で仲が悪くてなかなか面倒を見てもらえない。世話してもらえない状態の家もある。 ・親戚などに連絡しても私のところは付き合いがないと言われる。
高齢者支援と住民の間交流	地域の自治会と高齢者支援	<ul style="list-style-type: none"> ・田舎のことで常会がある。常会ではなんでも地域のことは伝達していく場になる。 ・常会に出ない人もいる。 ・地域との関わりは集金常会だけの高齢者もいる。自治会長から情報をもらうだけで交流はない。 ・自治会の助け合いについて、会長の個人の意識の差や地区によっては、隣近所、声をかけあって買い物支援で一緒に行く所もある。 ・ある自治会では、会長を通して地区の困っている人のことで、民生委員に相談があり生活支援のヘルパーが入ったこともある。 ・最近では自治会単位でやっていたことを連合自治会と自主組織を作る動きもある。 ・自治会も何代も前からあるところ、この数十年で出来上がった自治会とでは、意識の違いがある。 ・若い者会、年寄り会、婦人会とか伝統的な所は投げかけるとうまくいく。 ・自治会だけでは浸透しないこともある。 ・地域の付き合いは希薄。

高齢者の交流の場		<ul style="list-style-type: none"> ・いきいきサロンに参加する人はいいけれど参加しない人が出てくれると安心。 ・いきいきサロンは何年もたっていないが一緒に何かすることでコミュニケーションがとれ、そこで初めて顔を合わすことになる。情報交換をしていきいきサロンは良かったと言われる。 ・いきいきサロンの担い手がない。50代、60代は勤めをしている。音頭とりはなかなか負担になる。 ・サロンとかではなく隣近所の見守りがあって、いつも御茶を飲んでおられる。 ・近所同士でサロンのことをやっておられお互い声をかけあって御茶をむ高齢者さんたちもいる。
今後の地域交流のかたち		<ul style="list-style-type: none"> ・隣近所に気兼ねせずにいけるような地域になるといい。そういう環境が1番住みやすい。 ・昔のように小さい単位で頼りあうようなことができれば生きがいを感じられる。 ・親戚付き合いを元気な時からしていくことが大事になる。 ・近所付き合いも元気な時から上手に付き合うことが大切と感じる。 ・高齢者が普段から御茶を飲む隣近所が当たり前だとうことになるという。 ・1人暮らしの人が近所の人が見守りされているよいちいきになるといい。

IV. 考察

木次町・吉田町のインタビュー調査結果、7つのサブカテゴリーの表現方法は異なるが、2地域に共通するコード内容の類似性からサブカテゴリーを3つに集約し、1.【巡回から見える高齢者の生活/在宅生活の限界；吉田町】、2.【地域連携と活動の壁；吉田町/民生委員の活動の内容とジレンマ；木次町/地域連携と高齢者のサービス利用意識；木次町】、3.【地域生活・環境の変化；吉田町/高齢者支援と住民間交流；木次町】について、高齢者の生活の実情や地域の課題から農山間部で暮らす高齢者ができる限り住み慣れた地域で生活するための要件について考察する。

1.【巡回から見える高齢者の生活/在宅生活の限界；吉田町】

雲南市でも平野部で中央部に位置する木次町と農山間部に位置する吉田町の民生委員の活動から見える比較では、吉田町の民生委員の支援活動は、農山間地域という巡回時の不便さや閉鎖的な地域環境、つまり狭い地域で顔見知りの住民への支援活動は距離感を大事にしなが見守り重視型の支援活動になっていることが推測される。農山間地域にある風習やそこで培われる人間関係の築かれ方が民生委員の活動の幅や地域住民との関係性の深度に影響を与えている印象がうかがえる。一方、木次町の場合は、雲南市の中心部に位置し商業地であり、そこで築かれる人間関係の築き方や行政機関をはじめ

様々な情報や困ったときの対処について、同地域の担当支援者は、吉田町のような住民との日常的な緊密な対人環境、地域環境にないことが奏して積極的介入を可能にしていることがうかがえる。また、高齢者の生活上の問題への対処は、身近に地域包括支援センターもありタイムリーに協働・支援活動をできる環境があり、住民からの相談や早期の課題解決に至っている。

高齢者支援において、渡辺らが「介護保険に対する認知度が高い民生委員ほど地域の高齢者の福祉に対する関わりが大きい」ことを明らかにしているが、民生委員が直接介入する行動力や介護保険の給付サービスについて知識を持つ委員は、実際に具体的に高齢者の生活の中に入りアドバイスを行っている。1人暮らしや老老世帯で、相談者が少ない高齢者に対して直接的な介入、実践的支援してくれる存在が身近にあることで、高齢者の安心・安全な生活の確保に繋がっている。これは、都市部の高齢者支援に共通する部分でもある。

吉田町の場合は、住民からの相談は少ない地域であり、民生委員自身も、担当地域の高齢者に声をかけるのは、「どげなかね」と声をかけるのに抵抗があると発言されている。その背景には、農山間地域に共通した閉鎖的な環境、「身内のことは身内で解決する」「人様に迷惑をかけないように、地域に世話にならないように」という風土や小集落で昔からの人間関係や近所同士

の付き合いが継続されており、民生委員の活動に対して「福祉の世話になる意識」、「近所への体裁の悪さ」等の気持ちも一因となっているのではないかと。しかし、高齢化の進む農山間部の地域では、高齢者の自助力の限界から互助に目を向けた時、地域もまた脆弱化し相互扶助力等、地域の助け合い機能も脆弱下している。高齢者が相互に支え合うことのできる環境になるためには、高齢者自身の意識の改革が重要になると考える。高齢者の自立機能の低下に対して、自助はもとより互助、共助、公助を視野に入れ、基盤となる家族との関係性や自分らしく生きる積極的な選択肢を高齢者自身が早期から持てる環境づくりが早急な重要課題になるのではないかと。

2. 【地域連携と活動の壁/民生委員の活動の内容とジレンマ/地域連携と高齢者のサービス利用意識】

木次町の活動では、高齢者の生活を把握する手段に配食サービスの配達する人に食事の摂取状況を確認したり、サービス業者利用による生活具合の程度の把握、入院を拒否する高齢者に粘り強く説得を行うなど積極的・能動的な活動・介入が見られる。反面、民生委員の役割の範疇を超える地域からの要求や高齢者に関する個人情報や個人のプライバシーの尊重などが支援を阻害する要因になり民生委員のジレンマになっている。吉田町の場合、高齢者自身からの相談が少ないことや民生委員が積極的に介入できる風土ではない環境から支援者側は、受動的な活動になっている。担当の高齢者を介護支援業者にバトンタッチした場合、介護事業者に任す形になり、その後の連携や協働する環境は作られていない。また、高齢者の情報を得たいニーズがあっても個人情報の保護などで情報を得難い

と語られている。木次町も吉田町も共通して高齢者支援をしていくなかで課題になっているのは、個人情報の保護により支援に必要な情報が得られないことである。地域で連携して高齢者を支えるためには、情報の共有は不可欠といえる。高齢者が、よりよい生活を維持、可能にするためには、専門職者と関係者が協働・連携していくための個人情報の共有や開示の有効活用についての検討が有用である。地域包括ケアシステム機能の活用方法が鍵にもなる。

3. 【地域生活・環境の変化/高齢者支援と住民間の交流】

木次町の場合、高齢者がサロン活動を通して初めて参加者同士が顔を合わせ、一緒に何かをするすることでコミュニケーションが取れ、情報交換の場になり生活の満足感につながっていた。吉田町のサロン活動は、地域の有志で作られた老人クラブの参加者がサロンに参加できるという形で参加者が限定されている。地域の高齢者が集いやすい交流の場作りは、交通の利便性や高齢者の負担のない場作りが望ましい。しかし、利便性の悪い地域では難しいことは理解できる。

地域の少子高齢化が進み高齢化率36.6%と高い吉田町では、以前に見られた、子供を媒体に可能だった地域の繋がりや農作業の協働化などの相互扶助の環境はすでに崩壊している。冬場の雪かきの問題でも小集落の中の共通の課題というよりは、家の問題として捉えられていたり、高齢者からSOSを発信できる風土が育っていない。高齢化率の高い地域における地域間の交流は、高齢者が安心して暮らせるためには不可欠である。高齢者自身の取り組みだけでは難しく、高齢者世帯の孤立化や高齢者の孤独を防ぐことを含め地域全体で取り組む必要がある。

自治会活動においても、木次町は、地区内の

高齢者の問者を視野に入れた取り組みがされているが、吉田町の場合、地域の高齢化やマンパワーの問題から地域に共通する農事関連する事項で手一杯な印象が伺えた。木次町も吉田町も一部の地区では、近所の高齢者同士がそれぞれの家を訪問してお茶を飲み時間を共有し楽しむ風習がある。高齢者が自発的に活動できる場面である。住民同士で相互支援できていること、困難なことについて地域の問題として、地区住民の立場で高齢者支援について積極的な検討する場が求められるがそのためには地区の人材育成や高齢者問題や地域の活性化に対するリーダーシップが重要になる。

V. 結論

農山間地域の高齢者ができる限り在宅生活を継続するために必要な要件を明らかにすることを目的とし、2地域の民生委員へのインタビューを行った結果、以下の点が明らかになった。

1. 【巡回から見える高齢者の生活/在宅生活の限界】

高齢化の進む農山間部の地域では、高齢者の自立機能の低下に対して、自助はもとより互助、共助、公助を視野に入れ、基盤となる家族との関係性や自分らしく生きる積極的な選択肢を高齢者自身が早期から持てる環境づくりが早急な重要課題になる。

2. 【地域連携と活動の壁/民生委員の活動の内容とジレンマ/地域連携と高齢者のサービス利用意識】

高齢者支援をしていくなかで課題になっているのは、個人情報保護により支援に必要な情報が得られないことである。地域で連携して高齢者を支えるためには、情報共有は不可欠といえる。専門職者と関係者が協働・連携していくための個人情報の共有や開示の有効活用につい

て慎重な検討が必要である。

3. 【地域生活・環境の変化/高齢者支援と住民間交流】

吉田町は少子高齢化が進み高齢化率36.6%と高く昔、見られた子供を媒体に可能だった地域の繋がりや農作業の共同化などの互助関係はすでに消滅している。高齢化していく地域社会のなかで高齢者支援の空気は高まっている意見があったように地域住民の間で地域の活性化のためには地域資源の不足は想定されるが人材育成や地域住民のリーダーシップが重要になる。

謝辞

本研究にご協力いただきました雲南市地域包括支援センター、雲南市木次町の行政保健師、雲南市福祉協議会の皆様、木次町、吉田町の民生委員の皆様にご心より感謝申し上げます。

文献

- ・ 雲南地域日常生活圏域ニーズ調査報告書 雲南広域連合3 ; . 2011.
- ・ 松永容子、杉沢秀博：民生委員における地域包括支援センター活動との関わり、老年学雑誌 第3号53-64, 2012.
- ・ 渡辺祐一、安保尚、ほか：民生委員の高齢者支援パワーに関する要因、健康科学大学紀要 (6) : 125-133, 2010.
- ・ sharon vaughn, Jane M. Sinagub, Focus group interviews in education and psychology, 5. 2006.
- ・ 冷水 豊 編著、「地域生活の質」に基づく高齢者ケアの促進 : 3. 2009.
- ・ 松下光子・米増 直美：過疎地域で別居の子供による通い介護を受けて暮らす高齢世帯への地域住民による支援を促す方法の検討 : Vol. 12, No2, pp51-56, 2010

Requirements for elderly adults in rural communities to be able to continue living at home as long as possible

Understanding the lives of elderly adults and challenges they face
through public and child welfare committee activities

Fumie ISHIBASHI

keywords: rural communities, elder support, living at home, public and child welfare committees

Abstract

The objective of this study was to determine what is required for elderly adults to be able to continue living at home as long as possible. The study focused on two rural communities in Unnan City, which is located in the eastern part of Shimane Prefecture in Japan. With the cooperation of the Unnan City Council of Social Welfare, public and child welfare committees in the two towns were interviewed in focus groups about the lives of elderly adults and the challenges they face, based on a guided interview format, and qualitative inductive analysis was performed. It was found that even though both areas were rural communities, factors such as differences in residents' lifestyles due to local differences between the communities and differences in the extent of intervention by public and child welfare committees affected the safety and security of elderly adults' lives. Factors that impede support by those who support elderly adults were also identified. These results indicate that requirements beyond the expertise of those who offer support include engaging in efforts to connect elderly adults with their community and enhancing connections of support to elderly adults' lifestyles, ways of thinking, and families.